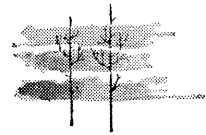


山羊を連れて……………

——園長日記(2)——

周 郷 博



昨年の春、幼稚園長併任になったとき、教頭の村田さんと電話で話した記憶が、いまでも耳に残っている。要するに、この幼稚園にはいかなる動物も置けない。(飼うことはできない)理由は「野犬」がきて食べてしまうからということ、全然そんなことは考えておりません、といった口振りだった。

私としては、どうしても腹に収めかねる答えで、園長になって、いろいろ考えなければならぬ問題(じつは、それらのどのひとつも「難問」なのだ)のひとつとして、どんな動物を園に連れてくるか、ということを考えてつづけてきた。

用事で、あるいは講演を頼まれたりして、他の幼稚園へ行ってみると、兎がいたり、ニワトリがいたり、小鳥が澄んだ声で鳴いていたり……、そういう「生きもの」がいっしょに棲んでいるということで、何か、浄化された、幼稚園らしい、幼いものがそこで育っていくのにふさわしいふんい気がそこにあるように思われた。

もともと、私は、愛玩用にそんな動物を「飼って」おこうという考えではなかった。むしろ、そういう動物、「生きもの」の「世話」をする、ということ、もつとえば、そういう「生きもの」——動物や植物と「いっしょに生きる」ことで、図鑑や間接知識で「知った」のと

は違った、じかに事物（これは造物主が創ったものという意味だが）を「知る」機会を幼いものたちが「身につける」だろうし、またそういうことで、放っておけば擦り減ってしまう「人間性」が（「思いやり」や「善意」そうして「根気」が）立ち直るだろう、というのが、私の「願い」だった。

川が流れている、小鳥の声がきこえる、野の花のうつくしさがそこにある——そういうところこそ、幼いものたちが育つにふさわしい「環境」なのだ、と私は考えていた。そんな考えは「時代遅れ」の「センチメンタリズム」などという横やりは、今こそ通りがわるいはずである。私は、その「時代遅れ」を大切にしなければならぬ、と考えていた。

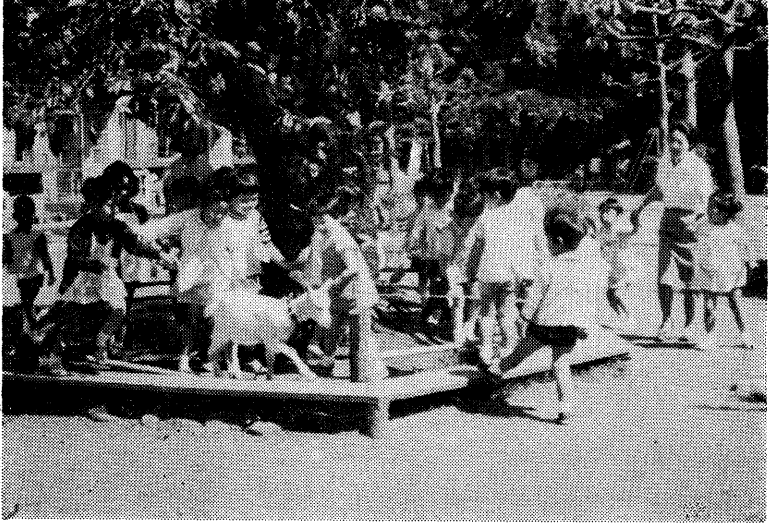
ともかく、一つ、山羊をこの園に連れてこよう……その腹をきめたのは昨年の秋ごろからだだったが、それには、用務員が二人とも、六時になったらさっさと帰ってしまうという状態では、山羊にしたってここには置けないのだ。たまたま、この春の用務員の配置転換で吉野さ

んという人が、この園に泊り込みで配置されることになった。私は、この吉野さんとも話し合っておいたほうがいいと思つて、雑談している中に、吉野さんはアヒルがいい、あるいはロバがいい、などといひだした。

が、子どもたちも、私の話のはいはいから「山羊がくる」ということにすでに何かの憧れをもっていて、少数になると「園長先生、山羊イツクルノ？」などと聞く子も何人かいたし、私の「願い」を伝えきいて、長男のお嫁さんの実家では、仔山羊がいるから連れにこないかといつてきていた……。それで五月二十一日、全学遠足の日に、思い切つて、大学の小型トラックで、埼玉県の鴻の巣のその農家まで、山羊を連れに行ったのである。

生後二カ月のメスの仔山羊、それにニワトリ三羽と、自分の餌までつけて……、田舎の、人のいい両親が、仔山羊を抱いてきて車に乗せたとき、どんな気持ちだったろうか、と私は今でも思い出す。

その山羊が、わずかに二十五日間この園に生きていて



六月の十五日の未明（私の誕生日の翌日の未明）三時ごろに突然悲しい叫び声をあげて、死んでしまったのである。

いつの間にか「山羊のメリーちゃん」とみんなが呼ぶようになって、山羊といっしょにいることが、子どもたちには何か新鮮なものを「与えて」（触発して）いた。やれやれこれで私が考えていたひとつの「環境」はそろったぞと、私は「これからだ」と思っていた。

山羊が「病氣」になって食べものを吐いたりした翌日など、「園長先生、山羊ガオナカコワシタンドヨ、カワイソウダヨ」と口々に子どもたちが体をすり寄せるようにして私のところへ集まってきた。夜明けがた、野犬が三匹でこの仔山羊をおそったり……、山羊が塀を越えて遠くまで散歩に行ってしまったり……そんな突発事件のとき、子どもたちも幼いながら、それぞれにその子の性質がでてきて「発見」のたのしさがあつたし、先生たちのあいだでも、そんなことで思わず気持ちほぐれてくる、といった作用も起こる。

厄介なことが次々に起こっても、それはそれで停滞しがちな園の空気を若返らせてくれた。

上野動物園の遠藤さんも、わざわざ一日訪ねてきてくれて、動物園の人ずれした山羊たちと違って「かわいい仔山羊」だ、といってくれた。

はじめのうちは桑の葉などしか食べなかった山羊のメリーちゃんに、お母さんたちが、連れ立って近所の藪の桑の葉をとってきてくれたりもした。夕方、鈴をつけて大学の構内を散歩して駆けて歩いた姿が目に残っている。

「大自然の代表」のつもりで、そうして連れてきた山羊が、外からきた消毒液のかかった葉を食べて死んでしまった。私たちに、その死は何かを語ってくれている。生まれて三カ月にもならず昇天した山羊のメリーちゃん（処女マリア？）その死が無駄でなかったように、私は心をつくしてやっていたいこう。

いまでは、やっとおとなになりかけたニワトリの一羽のオスのひと倍大きな「コケコッコ」だけが、名残りのように園の庭にきこえている。